

軍国少年だったころ

鹿沼市 男性

●数年早く生まれたら戦地に行っていた？

長野県飯田市の在で生まれ、育ちました。終戦の時は12歳で子供でしたが、けっこうその頃のこととは記憶にあります。

よく遊んでくれた3級先輩は海軍で戦死していますから、もう少し早く生まれていたら戦争に行っていた可能性もあります。

当時は国民学校が6年、その次の高等科2年を卒業すると14、15歳ですが、男の卒業後の選抜肢は3つしかありませんでした。農家の長男はともかく、志願して予科練とか、海兵団に行くか、満蒙開拓の義勇軍に行くか、船舶船乗り（一般の船が相当沈められたので船員が足りなかった）、この3つの道しかなかったのです。その先輩は海軍に志願して、戦艦「むつ」に乗って出撃しましたが、金華山の東方で撃沈され、16歳で戦死しました。

志願兵は体格の最低限度がありますから、あと何センチ伸びれば俺は足りる、とか、学校では毎日その話ばかり。その頃は完全に、今でいう洗脳された軍国少年でしたから、「とにかく俺は兵隊になって、天皇陛下のために死ぬんだ」とだけしか考えていませんでした。

●子どもが死んでも泣けなかった母

ある家の人たちは優秀で、兄弟とも軍人で、特に弟は海軍兵学校で、私たちは憧れていました。陸軍中尉、海軍中尉で二人とも戦死しましたが、その当時は息子の死を悲しんではいけないわけです。軍国の母としては、「お国のために散ってくれてありがとう」ということで、笑って受け入れる、というのが新聞で喧伝された。親の気持ちなどまだわかりませんから、そういうものだというふうに思っていました。しかし、後になって、村で戦後50年史を出したなかに、「何が悲しいって、子どもに先立たれることほど悲しいものはない」としみじみ言っていたと知りました。

私の母は客観的な人でした。明治生まれでしたが、早い時期から「この戦争は負けるぞ」なんて言っていました。そんなことを表立って言ったら怒られますが、B29が日本の上空を毎晩やってくるわけですから、子どもたちには「こんな戦争勝てるもんか」と自信をもって言いましたね。

●兵隊さんを送るのは子どもの務め

子どもたちの義務でした。校内で出征兵士のある日は、日の丸をもって駅まで兵隊さんを見送りに行きました。

所帯を持った召集の人と、20歳で行く人たちのあいさつが少し違ってました。若い人は完全に軍人教育をたたき込まれていたもので、兵隊に

なった時のために寒げいで毎朝剣道をやり、出征の時には喜び勇んでいくわけです。20歳前の人は「行ってきます」とは言わないで、「逝きます」と言いました。帰る気持ちはない。

私より12歳年上の次兄は、初年兵勤務を終わって仕事をしておりました。当時は20歳に達した男子は徴兵検査に合格すると、入隊して鉄砲の扱い方や散兵戦（兵を、少人数を基本単位とする多くの分隊に分けて個別に行動させる戦術）のやり方はもちろん、場合によっては実戦配備を体験し、その期間が終わればいったん帰されるわけです（兄は満州配属でした）。だれでもそういう訓練をして二等兵が一階級上がって一等兵で戻ってくる。その後は召集がいつ来るかわかりません。戦況たけなわになると赤紙が来るのです。

次兄は昭和18年1月、勤務先から昼過ぎに「召集だ」と言って帰ってきました。翌日、金沢の師団に入隊するように、という命令です。すぐ近所の人たちが来て、きんぴらごぼうを作るとか、そんなものしかない、酒もあるかなしかの祝宴です。現在の町会長にあたる人がお祝いのあいさつに来てくれて、次の朝、神社で戦勝祈願をしてお神酒をいただき、挨拶をして、いよいよ歩いて駅まで行くわけです。その後を私たちは一緒に歩いて送っていきました。駅には村内で召集された人もその時間に来ていま

す。その日は、10人くらいいたでしょうが、昭和19、20年の2年くらいは続いたような記憶があります。「出征兵士を送る歌」を歌って送りました。

出征兵士を送る歌

(作詩 生田大三郎 作曲 林伊佐緒)

一、我が大君(おほきみ)に召されたる

命榮(は)えある朝ぼらけ

讚(たた)へて送る一億の

歓呼は高く天を衝(つ)く

いざ征けつはもの日本(に)つぼん(男兒)

二、華と咲く身の感激を

戎衣(じゅうい)の胸に引き緊(し)めて

正義の軍(いくさ)行(く)ところ

誰(たれ)か阻まんこの歩武(ほぶ)を

いざ征けつはもの日本男兒

三、輝く御旗(みはた)先立てて

越ゆる勝利の幾山河(いくさんが)

無敵日本の武勳(いさおし)を

世界に示す時ぞ今

いざ征けつはもの日本男兒

東条英機首相が「一億総決起」、最後は「一億総玉碎」という言葉を掲げました。それがあって学徒動員が18年、理工系と教育系以外は20歳に達すれば、全部召集されるということになりました。

駅で、出征兵士は電車が来るまでの間、こちらを向いて並んで見送られ、電車に乗り込んで行くわけです。飯田線の電車が入ってくると、すでに乗って来た出征兵士も全部、窓から日の丸を振ってくる。その時間の電車に集中するのでしょうか、出征兵士で満杯です。線路がカーブして見えなくなるまで、兵士が左右の窓から日の丸を振り続けた。「武運長久」とか、「祝〇〇君出征」とか、書いてもらった寄せ書きの旗です。90×90^{センチ}くらいの大きさ。3、4両の電車は旗だらけであったことが目に焼き付いています。辰野まではみんな一緒に行って、その後中央線に乗り換えて各入隊先に行ったのでしよう。

そういえば、当時の軍隊は「お前らは一錢五厘のはがきで召集できるが、馬は一錢五厘じゃ集められないぞ」と言われていたそうです。馬だって農家の使い慣れた馬、全部徴馬されたから(参照1)。当時は「人間」が「馬」以下です。人格などという言葉さえなかったわけですね。

●届かない手紙

その次兄は金沢から中国大陆に行きました。しかし軍隊の移動というのは秘密ですから、どこに行くという手紙を出すことはできなかつた。でも兄のことだから、きつとどこかにヒントがあるだろうと、送り返された私服(軍隊で

支給された軍服に着替える)を丹念に調べてみた。おふくろと私と2つ上の姉と弟と子どもたちばかりで、あちこち探してみたら、巻脚絆の中に「近日大陸中支へ向かう」と書いた小さな紙きれを見つけた。その兄は昭和21年の9月くらいまで音信がなくて、もう戦死したろうなあと思っていたら、帰ってきました。

兄の話では、こちらからの手紙は1通も届かなかったらしいです。兄も出したというのですが、うちには1通も来なかった。おそらく船が沈められてしまって、人間も手紙も沈没したのではないのでしょうか。検閲もありましたから、来たとしても不適切なものは消されて来るのです。

終戦時には中支ではなくて南支に行き、いまの香港の対岸、九竜で武装解除になったということです。仲間ばらばらにならずにいたらしいのですが、捕虜(蔣介石軍の捕虜だった)なので食べ物の支給は少なく、現地の大人(たいじん:大金持ち)のお妾さんの家の草取りなどの仕事をもらって、何とか命をつなぐことができたと言っていました。

兄は衛生兵でした。薬も何もなく、毎日衰弱して死んでいく同僚に何もすることができず、見殺しにされただけだったと悔いていました。名古屋に行った長兄は戦地には行くことなく、終戦と同時に徴用解除になりました。

●遺骨の迎え

農作業の手伝いに行っていると、遺骨が帰って来た時のラップのメロディが聞こえてくる。ああ今日も帰って来たな、と思った。3、4柱ずつ白木の箱で帰ってくる。その迎えにも行きませんでした。全部、村葬で、村長をはじめ行列して静かに帰ってきた。その時の自分の気持ちは、戦死してくるのは名誉なんだろうな、というくらい感情。子供なので、実感がなく、立派に戦死したんだろうな、と思うくらいでした。

学校には忠霊殿というのがあって、一つの教室に、戦死した人の遺影が全部飾ってありました。時により礼拝をさせられました。

●奉安殿の遷葬など、学校の暮らし

奉安殿(参照2)はもちろんありました。校舎の建物とは別に設置されていて、どの方角から通ってきてても、毎朝、子どもたちはまず奉安殿の場所まで行って、最敬礼(45度くらいまで体を倒した敬礼)をしてから校舎に入りました。式典は天長節(天皇が生まれた日)、地久節(皇后が生まれた日)、元日、明治節(明治天皇が崩御した日)など、それぞれ式典の歌とともに祝いしています。「雲にそびえる高千穂の…」今でも覚えていますが、音楽の先生が教えた歌というのはそういうものしか記憶にありません。

校長が特に熱心で、私の学校独特だったと思いますが、太平洋戦争が始まった12月8日か

ら、毎月8日を記念日にした。その日はお宮に行ってお参りもし、他の日は登校班ごとに集落の中を駆け足で「打倒英米!」と言いながら、一周し、それから学校に行きました。男女別、それぞれ20人くらい、時間にして20分くらいだったでしょうか。

そういう行動というのは、自分たちも、周囲の人たちも戦意高揚するわけです。学校の体操の時間にやった分列行進という、そういう団体の行動が効果的です。「左向け、前へ進め!」と級長が号令をかけると、一糸乱れず行進した。こんなことばかりだったから、遊びも全部戦争ごっこでした。

まだ中等学校に行っていないから、教練のための軍人が学校に来ることはなかった。現在のホームルームにあたる修練の時間は、忠君愛国の人の話など、そんなことばかり聞かされました。

終戦間際は勉強などせず、全員、農作業に出ました。1列に並んで、どこかの畑であろうとかまいなく、除草作業などで過ごした。校長の訓辞も「みんなは馬鹿でいい。戦争に勝って、みんなの子どもたちが勉強すればいい」というあいさつです。大きな学校で全校生1000人くらい、高等科まで入れると1200人くらいいました。

●終戦

男は年寄りか、病気で動けないような人以外は一人も残っていないくて、農家の人でも軍籍のない(45歳まで召集が来た)、年長の人たちも、もう敗戦直前には軍需工場へ全部徴用されていました。終戦の時には長兄は徴用で名古屋の軍需工場で飛行機の部品などを作っていました。8月15日はお盆ですから、たまたま休暇が重なって家へ帰ってきたんです。どこかで聞いたらしく、「日本、負けたぞ!」って、背負っていたリュックを、うちの上がり框にどさどさ投げ出して、ガツカリしていた。母は「そう思ってた」と悠然としていましたね。

ラジオはうちになかったから、私は終戦の詔勅を聞いていません。ラジオは地主の家とか、限られた家にはありませんでしたから。

長兄の話によると、工場にも空襲がありました。工場の寮長がたまたま前の日に少し酒を飲んで、逃げずにいたら、直撃弾で吹き飛ばされたと言っていました。その頃は空襲警報がしょっちゅう鳴って仕事にならなかったそうです。兄は逃げまくって帰る途中、どこかの神社で、爆撃で木の枝に死体が引っかかっているのを見たそうです。その頃は無差別爆撃です。東京の下町も、軍需工場のあるなしに関係なく大空襲がありましたね。

●終戦後の暮らしはどう変わったか

飯田市でいちばん大きな洋品店があり、おそ

らくそこだけが様式の建物で、接收されてそこが進駐軍 (GHQ・p13 参照) の本部になりましたね。青年団の鉄砲はすべて徴収され、高等科の女生徒がなぎなた、男子生徒は銃剣術をやりましたから、学校にあったなぎなたとか木刀とか木銃とか、そういうものは全部焼かされました。

校長先生が公職を追放されました。校長は大和魂を強調した学問、国学を重んじた人だったから、それが戦争の遂行理念と一致したのですね。結局兵隊というのも武士の延長なんです。兵隊が華々しく散るのを美しいことと考えた。感謝していることは、戦争が終わったとたんすぐ英語を教えてくれた先生がいたことです。その先生は戦時中に暴力を振るうようなことはありませんでした。ほとんどが代用教員でしたが、若い先生からは、ことあるごとにぶん殴られました。私の終戦直前の先生は、高等科を卒業して、傷痍軍人で村にいて青年会の会長をしていた。学校の先生は兵隊にとられて誰もいなくなっていました。

●「自由」って何? 「平等」って何?」

「進駐軍は、自由とか平等ってことを言う」と、英語を教えてくれた先生から聞きました。しかし意味が分かりませんでした。今まで、自由とか平等を聞いたり、考えたりしたことがなかったのですから。何が自由なのか、どうい

ことをさすのか、わかりませんでした。

●疎開の子どもたち

気の毒だったのは疎開でお寺に来ていた疎開児たちでした。東京の東大原国民学校という所から先生が付き添って、村内のお寺3か所に分宿していたんです。その生徒たちも農作業に駆り出されるわけです。私たちは子どもものころからやってくるが、都会の子が、やったことのないことをさせられて、子ども心に変だろなと思うと同情的にみていました。草取りだけでなく、何でもやらされた。

なかでも気の毒だと思ったのは、付き添ってきた先生が、召集で出征していなくなっちゃうんです。精神的な支柱がなくなって、さぞ心細かったことでしょう。

私たちがさえ、サツマイモが弁当替わりでしたから、食糧事情は厳しかったわけです。村に来ていた疎開の子どもたち200人くらいに、校長は何かお腹の足しになるものがないか、食糧が集まる産業組合(今のJAのようなもの)の組合長さんと一緒に、努力していたようです。

以上が、私が少年時代に体験したことですが、このころ、先生や偉い人の言っていることが、間違っているなどと考えていたわけではありません。戦後成人して、国のリーダーたちの言っていたことの本音を知りました。

いつの時代のリーダーも口にするのは人聞きの良い建前で、本音を言う人はありません。私は建前におおわれた本音を見抜く力を、常に養っておくことが大切だと考えております。そのためには、よく勉強することが必要です。

参照1…微馬記念碑



日露戦役 微馬記念碑
(明治41年建碑)

愛宕神社(鹿沼市北赤塚町)の日光西街道(日光道中壬生通り)沿いにあるもの。軍馬として徴用された馬を顕彰したもの。人間だけでなく馬も戦争に参加した。

参照2…奉安殿

現在の桜川市立真壁小学校にあった奉安殿。多くの奉安殿が日本建築・木造であったのに対し、真壁小学校の奉安殿はギリシャ建築(アーカンスラス文様)・石造りであった。戦前の日本において、天皇と皇后の写真



(御真影)と教育勅語を納めていた建物。(ウイキメディア・コモンズより)